

わたしの側、あなたの側



教会機関誌

マリッサ・デニス

(ほんとうにあったお話をもとに書かれました)

「見よ、〔きょうだい〕が和合して共におるのはいかにうるわしく楽しいことであろう。」(詩篇 133:1)

「ミーガン! あなたのくつが部屋のわたしの側にあるわよ!」

「ミアは、むっとした声で言いました。」

「そう、ミアの聖典はわたしの側にあるけど」とミーガンは言いました。

お母さんが部屋をのぞきこみました。「あなたたち、そうじがはかどっていないみたいね。部屋がきれいになるまで公園には行っちゃだめよ。」

「でも、これは全部ミーガンが散らかしたのよ!」

ミアは言いました。「わたしが片付けられないなんて、不公平よ。」

「全部がわたしのものだっていうの!」

ミーガンが言いました。

「あーあ。」ミアはうで組みをしました。

「自分だけの部屋があったらなあ。どうして

ミーガンと一緒に使わなきゃいけないの?

マイケルは自分だけの部屋をもらえるのに!」

お母さんはため息をつきました。「ほかに部屋がないのは分かっているでしょ。マイケルは年上だから自分の部屋をもらえるのよ。」

「じゃあ、せめてミーガンのものはわたしの側に入れさせないようにして。」ミアは指で書いた目に見えない線で、部屋を半分に分けました。「分かった? そっちがあなたの側よ、ミーガン。こっちがわたしの側。」

「うーん」とお母さんが言いました。「カーテンを引いて部屋を仕切れないから。そうすれば二人とも仲良くできそう?」

ミアはにっこり笑いました。「ええ!」

次の日、お母さんは何枚かのぬのをぬってカーテンを作りました。カーテンは紫色で、チェック模様がついていました。全体の下側に、お母さんはビーズがぶら下がったりポンもぬつけてくれました。その後、ミアとミーガンは、お父さんが針金を使ってカーテンをかけるのを手伝いました。カーテンは部屋のはしからはしまでに達しました。

ミアは大よろこびで手をたたきました。「やっとな! まるで自分の部屋ができたみたい!」

ミアはクレヨンを引っぱり出して、絵に色をぬりました。けれども何分かって、ミアはたいくつになりました。カーテンの向こ

う側でミーガンはどうしているかな、と思いました。いつもは一緒に色をぬっていたのです。一人でするのは、さびしいような感じがしました。

その夜、ミアはひざまずいて、ねる前のおいのりをしました。ミアは自分の家と家族について、天のお父様に感謝しました。すると、少し悲しい気持ちになりました。自分の場所を持つのはよかったのですが、ミーガンと遊べないのはさびしい気がしました。

ミアはベッドにもぐりこみました。けれども、ねむれませぬ。ミアは寝返りを打ちました。カーテンとかべの小さなすき間から、ミーガンの頭が見えました。

「ミーガン?」とミアはささやきました。「起きてる?」

「うん。」ミーガンがささやき返しました。

「メールボックスを作ってみたらどうか?」ミアはそう聞きました。「それにおたがいの手紙を入れるの。」

「いいアイデアね」とミーガンが言いました。「明日やる?」

「そうね。」ミアはほほえみながら目をとじました。

「おやすみ、ミーガン。」

「おやすみ、ミア。」

次の日、ミアは小さな箱を見つけました。そして、それを部屋の両側の間に置きました。それから、こんな手紙を書いて中に入れました。「ミーガン、わたしのぬいぐるみで遊びたい? 愛をこめて、ミア。」

ミーガンは手紙を取り出して読みました。「ええ、とっても!」1 週間の間ずっと、ミアとミーガンはおたがいにあてた手紙をメールボックスに入れ続けました。そして二人は毎日一緒に遊びました。あるときはミアの側で遊びました。あるときはミーガンの側で遊びました。けれども、二人はいつも一緒に楽しみました。

「ねえ」とミアはある日、ミーガンに言いました。「結局、このカーテンが必要なのが分からなくなっちゃった。」

「そうね」とミーガンは言いました。「じゃま感じがするね。」お父さんの助けをかりて、二人はカーテンを取り外しました。「二人が仲良くすることを学んでくれてうれしいよ」とお父さんは言いました。

ミアはミーガンにほほえみかけました。「わたしも。」●

◆「わたしに従ってきなさい」の教義と聖約 102 - 105 章参照